

P6-2 「帰りたい」場所から「また来たい」場所へ — 認知症高齢者との作業を通じた関わり —

○石川 優佳(OT)

社会福祉法人邦寿会 高殿苑ホームケアサービスセンター

Key word : 通所介護, 認知症高齢者, 不安

【はじめに】今回、認知症の記憶障害による不安が強くなり、身体愁訴や帰宅願望がみられる事例を担当した。事例が不安にとらわれず得意なことに目を向けられるよう、作業療法士の関わり方も含めた環境作りを行い、通所介護(以下、デイ)で落ち着いて過ごすことができるようになったため以下に報告する。なお、報告にあたり本人及び家族に同意を得た。

【事例紹介】A氏は80代前半の女性、アルツハイマー型認知症、要介護3、息子と2人暮らし。結婚前に10年ほど文具メーカーで色の開発に携わり、同僚にアドバイスする役割も担っていた。世話好きな性格で、趣味の手芸を友人に教えることもあった。X-1年春頃より物忘れが始まり、1人になると不安が強まりめまいやふらつきが現れ、頻りに救急車を呼ぶようになり、デイ利用開始となる。最初利用していたデイにて物忘れによるトラブルがあり、A氏は「私のせいで人にまた迷惑をかけたくない」と感じている。当デイはX年3月より週1回利用し、5月より毎回約20分の小集団体操等の作業療法介入を行ったが、不安の訴えに著変を認めず10月より個別介入を開始した。

【作業療法評価・治療方針】個別介入開始時はNMスケール42/50点、コミュニケーション能力や遠隔記憶、特に仕事や子育てをしていた頃の記憶は良好。近時記憶障害が目立ち、1人になると鞆に携帯電話や鍵が入っているか確認するなどそわそわしていることが多く、不安が強まると身体愁訴とともに「帰りたい」と泣き始め、家人や警察に電話してしまうこともあった。A氏の思いを傾聴すると、「さっき聞いたことをまた聞いたりして自分が自分でないようで怖い。元気に過ごしたい」と不安と葛藤が語られた。しかし、手芸等の話題では「色を考えたりするのは得意、私であればいくらでも教える」と表情が明るくなった。そこで、A氏に今できる得意なことに目を向け

てもらうことを目標に、「色を考え」「教える」機会を作ることにした。なお、趣味の手芸はしばらく取り組んでいない状況であったことに加え、細かい手作業では「目が見えにくい、クラクラしてきた」と身体愁訴に繋がる可能性があったため、確実にA氏が達成感を得られるよう、まずは壁紙制作の色合いに関するアドバイスを依頼することとした。作業中は、作業療法士1人では完成させられないことを強調し、教えてもらうことを意識して関わった。

【結果】介入1回目、A氏は壁紙制作の配色について積極的にアドバイスし、作業中は文具メーカーでの経験を誇らしげに話していた。完成した壁紙を見ながら「こういうの得意やねん」と満足気であった。2回目以降、ダイルームに飾るツリー等を一緒に制作し、完成作品はA氏の目に入る場所に飾るようにした。5回目より、飾られた作品を見て「私が作ったやつや、私の技術を生かせるなら嬉しい」と笑顔を見せ、「今日は何教えて欲しい?」と作業療法士に自ら声を掛けるようにもなった。徐々に身体愁訴は減少、帰宅願望を訴えることはなくなり、8回目には「ここに来たら安心する。また来たい」と話した。

【考察】今回、作業を通して今できる得意なことに目を向けてもらうことで、デイで不安にとらわれることなく落ち着いて過ごせる時間を増やすことができた。さらに、作品制作を重ねるにつれ、A氏は作業療法士を“作品制作を教える対象”として捉えるようになり、記憶に定着した。飾られた作品が目に入ることによって作業療法士の存在と作品制作の記憶が想起され、デイがA氏にとって以前のように人の役に立ち、自分らしくいられる「また来たい」場所となったのではないかと考えられた。